

苦難を乗り越え作品を書き続けた作家

三浦綾子

三浦綾子は、一九二二年、旭川市で生まれました。学校卒業後は、旭川市などの小学校で教師として勤めました。



〔三浦綾子記念文学館蔵〕

綾子は、情熱あふれる教師でしたが、当時、日本は終戦を迎え、社会や学校のあり方が大きく変わったため、これまでの自分を見失い、教師を辞める決断をしました。その後間もなく、綾子は肺結核や脊椎カリエスなどの大きな病気にかかり、十三年にもわたる療養生活を送りました。病氣療養中の綾子は、何を目標にして生きてよいか分からず、この世のものが全てむなしく思えた時期もありました。そんな綾子でしたが、後に夫となる光世など、様々な人々の支えがあり、懸命に療養に努めて病気を治しました。

一九六三年の正月、綾子は、実家へ年始の挨拶に行きました。そのとき、綾子の母は思いついたように、「あ、そ

うそう、秀夫（綾子の弟）がね、綾ちゃんが来たら、これを見せなさいと言ってたよ。」と新聞の広告を見せながら話しました。その広告には、「朝日新聞一千万円懸賞小説」の募集のことが書かれていました。この新聞小説の募集は、賞金が大変高額であることや、すでに作品を書いている作家でも応募できることなどが、当時の大きな話題となりました。新聞の広告を見たとき、綾子は自分には縁のない話だと思いました。しかし、その夜、布団に入りながら、「小説を書いたことがない私に書けるわけがないけれども、書くとしたらどんな小説になるのだろう。」「大変な応募数になるのだろう。」などと、一人想像をめぐらししました。その後、自分の体験から小説のヒントを思いつき、あらすじを考えて、次の日に夫に相談しました。夫は、「やってみるといい。」と言ってくれました。こうして、綾子の創作活動は始まりました。

ある日、新聞に綾子の尊敬する作家が書いた小説の書き方についての記事に、「小説を書くのは、素人にはまず無理だ。」ということが書かれていました。綾子の心は大きく揺れましたが、それでも、やってみたいという気持ちが強くなりました。

綾子は雑貨店を営んでおり、小説を書くのは雑貨店の仕事が終わった後でした。旭川の夜はとても寒く、ペンを持つ手は冷え切ってしまいましたが、それでも、自分のしたいことをするということは、決して辛くはありませんでした。

小説の執筆は、進むにつれて難しくなっていました。「自分には、一年間で千枚の原稿を書く力があるのか。」と思うこともありましたが、綾子は書きながら、「小説を通して自分が考えていることや信じていることを多くの人に伝えたい。」という強い思いをもつようになっていきました。

その年の十二月三十一日、小説『氷点』はついに完成し、原稿は、その日のうちに新聞社に送られました。綾子の小説を含め、新聞社には七百三十一一点もの作品の応募があり、どの作品も原稿用紙千枚をこえる大作ばかりでした。綾子は、応募数を聞いて入選をあきらめていましたが、『氷点』は一次審査、二次審査と通過していき、ついに一位入選となりました。小説を書いた経験のない雑貨店を営む主婦が一位に入選したことは、当時大きな話題となりました。

その後も綾子は、北海道を舞台とした『塩狩峠』『泥

流地帯』『天北原野』『銃口』などの作品を発表しました。

綾子の創作活動を支え続けた夫の光世は、綾子について次のように語っています。

「綾子は、十三年間の闘病生活という、苦難に向き合ったことで、その後、みなさんに読んでいただける作品を書くことができました。そんな綾子の姿を通して、希望をもって生きるこの意味について考えてほしいです。」

一九二二	旭川市で生まれる
一九四六	肺結核を発病し入院(三十四歳)
一九五二	闘病中にキリスト教に入信(三十歳)
一九六三	「朝日新聞一千万円懸賞小説」に応募(四十二歳)
一九六四	懸賞新聞小説に『氷点』が一位入選(四十二歳)
一九九四	最後の長編小説『銃口』が発刊(七十二歳)
一九九九	旭川市の病院で死去する(七十七歳)

* 肺結核：結核菌が肺に入って引き起こす病気

* 脊椎カリエス：結核菌が背骨に入って引き起こす病気